

戀の句を書くべき扇買ひにけり

藤田湘子

湘子は用意周到である。いつも先々のことを考えていた。永島靖子編の「鷹年譜」によれば、昭和五十八年の六月四日、五日と、宮城県作並温泉で、二百三十名による鷹吟行会が開かれている。

この句は、その約1ヶ月前。「戀の句を書くべき扇」とは、句会当日の成績優秀者への賞品にしようと思立ち、俳句揮毫用の白扇を買い求めたのかもしれない。

さて、鷹の弟子に授与したとしたら、どの句を書いたのだろう。湘子には恋の句が多いと思っていたが、案外思いつけない。ある程度知れ渡った句が喜ばれるだろうし、何かの折りには床の間に飾ってもらえる句。

やはり「逢ひにゆく八十八夜の雨の坂」だろうか。

1983年 (558.05.06作) 第六句集『一個』 鑑賞・轍郁摩